論　文　内　容　の　要　旨

楊　　健

本研究は、現代日本語における自他両用漢語動詞の用法について考察するものである。和語動詞に関しては、「閉じる」「開く」「伴う」「増す」のような自動詞用法と他動詞用法を併せ持つ、いわゆる自他両用の動詞は少数に限られるが、漢語サ変動詞には自他両用とされる動詞が数多く存在する。また、「立つ・立てる」「割れる･割る」「始まる･始める」「流れる･流す」のようなかなりの割合の和語動詞については、語源を同じくすると見られる他動詞と自動詞がペアになっていて、形態が自動詞か他動詞かを判断する手がかりとなりうる。これに対して、漢語サ変動詞の場合は、「VN する」という一つの形態しか持っていないため、形態的な自他判別の手がかりは基本的にない。このことから、日本語の学習者にとっては、漢語動詞の自他を判断することは極めて困難と思われる。

本研究は、国語辞書および「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(中納言)を利用して、実例を基にして自他両用の漢語動詞の用法を記述し、そこから動詞の意味と自動・他動に関わる一般的な傾向、法則を究明することを目標とする。研究の手順として、まず漢語動詞をめぐる先行研究を概観し、従来の研究における自他両用の定義を明らかにしたうえで、本研究の立場、先行研究との関連性を述べる。続いて、国語辞書において「自他サ変」とされる漢語動詞に着目し、それらの動詞が「自他両用」動詞にあたるか否かについて考察する。そして、真に自他両用と見るべき漢語動詞にも、自動詞と他動詞の用法のどちらかに傾く傾向がないかを調べる。さらに、自動詞専用の傾向にある動詞、他動詞専用の傾向にある動詞の用法に見られる制限について考察する。最後に、自他両用の漢語動詞のうち、特殊な用法が見られる動詞に注目し、その用法に見られる規則について説明する。具体的には、「移動経路」や「移動領域」を表す自動詞用法を持つ漢語動詞「移動スル」、ニ格を取る自動詞用法を持つ「反映スル」などを対象とする。

本論文は、序章にあたる第一章および終章にあたる第八章を除けば、本論の部分にあたる第二章から第七章までを、以下のようにまとめる。

第二章では、漢語動詞をめぐる先行研究を概観する。当該のテーマでは、動詞の内部構造に関する研究と、動詞の自他の用法に関する研究が多く見られる。同章では、これまでの研究に従って、「非対格構文(X ガ V) vs 対格構文(X ヲ V)」という構文的な対応関係をもつ動詞 V を自他両用の動詞とする立場を明らかにする。

第三章では、国語辞書において「自他サ変」とされる漢語動詞に着目し、これらの動詞が「非対格構文 vs 対格構文」という構文的な対応関係を持つか否かを検討する。そして、国語辞書で「自他サ変」とされる動詞のすべてが、「非対格構文 vs 対格構文」の対応関係を持つわけではないことを明らかにする。すなわち、「自他サ変」には「非能格構文 vs 対格構文」

の対応関係を持つ動詞、ニ格を取る自動詞用法を持つ動詞、実際には他動詞用法が見られない動詞が含まれている。さらに、「非対格構文 vs 対格構文」の対応関係を持つ自他両用の漢語動詞のなかには、自動詞または他動詞としての使用に偏る傾向を示すものがある。例えば、「開始する」「破壊する」などは他動詞専用の傾向を示す動詞であるが、「増加する」「減少する」「発生する」などは自動詞専用の傾向を示す動詞である。このことを第三章ではデータに基づいて記述する。

第四章では、「増加する」「減少する」「発生する」といった自動詞専用の傾向を示す両用動詞に着目し、これらの動詞の他動詞用法に見られる制限について考察する。先行研究では、「再帰性」や「再帰的な関係」でその制限を解釈しているが、実際に「再帰性」や「再帰的な関係」で説明できない例も見られる。同章では、他動詞文の主語を、「動作主主語」と「経験者主語」との 2 種類に分けて、認知言語学における動詞の他動性に関する解釈を参考にしつつ、以下のことを明らかにする。すなわち、「動作主主語」の場合、有生物主語は対格語をコントロールできるという関係を持ち、無生物主語は対格語との間に因果関係を持つことが重要な条件である。「経験者主語」の場合は、主語と対格語とは「全体部分の関係」に該当しなければならない。

第五章では、「開始する」「破壊する」といった他動詞専用の傾向を示す両用動詞に着目し、これらの動詞の自動詞用法に見られる制限について考察する。他動詞専用の傾向を示す漢語動詞の自動詞文は、無情物や出来事を表す名詞を主語に取ることが多い。これらの自動詞文が表す事態には、外的要因によって生じる事態が多く見られる。また、自動詞文の成立要因について、認知言語学における認知モデルに関する論述を参照しつつ、次のことを究明する。すなわち、外的な働きかけによって生じた結果事態は、認知ベースにおいて、その働きかけが背景化されうる場合、結果事態が焦点化されて、自動詞文が成立する。しかし、認知ベースにおいて、その働きかけが背景化されえない場合、自動詞文が成立しないこと、自動詞文の成立には働きかけと結果との直接性に関わることを究明する。

第六章では、漢語動詞「移動スル」に着目し、「移動スル」には対象補語を取る用法、移動補語を取る用法、状況補語を取る用法があるか否かについて考察する。また、各用法の間に関連性が存在するか否かについて論じる。移動補語を取る「移動スル」の場合は、移動経路の用法が一般的であるが、そのなかに、起点が含まれる経路という特殊な経路を示す例があること、および対象格と移動格との多義性が生じる例文について分析し、その多義性に関わる要因について論じる。すなわち、場所性を持つ名詞句は、一個体として対象化されうる場合、多義性が生じる。

第七章では、ニ格を取り、着点を表す補語を取る漢語動詞「反映スル」に着目し、「反映スル」に見られる「再帰性」「再帰的な関係」を持つ用法について考察する。「反映スル」には、ニ格補語を取ることができるため、使役形の用例数が多く見られる。日本語における「再帰性」「再帰的な関係」をめぐる先行研究を参照しつつ、「反映スル」と「反映サセル」に再帰性を持つ用法について考察する。すなわち、「反映スル」には、主体とニ格補語、主体とヲ格補語との間に再帰的な関係を持っている。